咬合と全身

「視点を変えれば違う歯科が見える ～咬合が口腔・体に及ぼす影響～」

[一社]兵庫県歯科技工士会
高田　明典

[抄録]

歯科医療で日常的に行われるクラウン・ブリッジ・義歯・インプラントなどを装着することは手段であり目的ではない。目的は咀嚼機能の回復のみならず、患者の身体的重心のバランスを取る振り子センサーである。硬い金属の咬合器と硬い石膏上で製作した補綴装置では、咀嚼時に歯が動き、骨は曲がり、骨は動き、柔らかい生体にはなじまない。その実態を理解せず、補綴された歯はその時から崩壊に向かって進行する。歯がぐらぐらし、脱落するのは歯周病だけではなく、ブラキシズムやチューイングサイクルにおける障害物を生体が取り除こうとしているのであり、そうでないと生体が耐えきれないからである。歯が抜けるのは意味があり、生体からの警告である。

その中で歯科技工士の私たちが評価しているのは、カービングの上手なポーセレンであったりインプラントの上部構造でジルコニアのフルマウステクニックを見て素晴らしいと感じるのではないかと思う。果たしてそれらが口腔内で機能しているのだろうか。頭蓋骨はいくつかのパーツから出来ていて、噛んだり呼吸をするたびにパーツは開いたり閉じたりして動いている。下顎骨も力がかかると曲がったりもする。

生体が緩和してくれているのではないだろうか。睡眠したとき歯の防御反応が無くなり、とんでもない力でブラキシズムが始まる。そのような時に私たちが作った補綴装置がどのようになるのか考えてほしい。ここでは日常行われている咬合の力と睡眠時に起こる咬合の力の比較を解ってもらえるように話していきたいと思う。